

「特別シンポジウム」

## クラスター爆弾問題を考える

～ブラニスラブ・カペタノビッチ氏を迎えて～

日時：二〇〇八年四月二六日（水）三時限（一：二〇～二：四〇）

場所：中京大学・センタービル（〇七〇三教室）

パネリスト：

ブラニスラブ・カペタノビッチ

（「クラスター兵器連合」スポークスパーソン）

目加田説子（中央大学 総合政策学部教授）

清水 俊弘（日本国際ボランティアセンター事務局長）

司会：金 キム 敬黙 ギョウモク（中京大学 国際教養学部准教授）

司会（金）：

では、お待たせいたしました。中京大学社会科学研究所とJCBL（地雷廃絶日本キャンペーン）との共催によって、「クラスター爆弾問題を考える」というシンポジウムを特別に中京大学で用意いたしましたので、九〇分前後の時間を使って何よりもクラスター爆弾問題への知識を深め、そして、私たちが一人一人としてどのように行動を

とるべきなのかということを考えるきっかけにしたいと思います。

本日の司会をすることになりました中京大学社会科学研究所・国際教養学部所属の金 敬黙と申します。よろしくお願い申し上げます。

簡単に、社会科学研究所の所長である檜山から短いあいさつを準備しておりますので、所長のあいさつの後、今日のシンポジスト、パネリストの紹介に入っていきますと思います。

檜山所長：

本日は、クラスター爆弾とそのプロセスということでシンポジウムを企画することになりました。このシンポジウムはご存じのように、現在ある中で反人道的な兵器の一つであるという、さらに平和が回復した後においても、子どもを含む一般市民、あるいは民間人が被害を受けるといったような、極めて非人道的な兵器であるクラスター爆弾の廃絶と全面的な使用禁止という、これを目指して組織されたNGOの連合体であるCMC（クラスター兵器連合）のスポークスパーソンとして世界各国を回ってこの廃絶を訴えておられるカペタノビッチさんが来られたわけです。そして、さらには名古屋にも寄っていただくということで、本学の社会科学研究所とJCBしが共催して特別シンポジウムを催すということになりました。

詳細についてはこれからこのシンポジウムをお聞きになってお分かりになると思いますが、ご存じのように我が国政府はこの廃絶の問題について極めて消極的です。ニューズなどでご存じだと思いますが、国会答弁でも聞いたように、国防上も必要な兵器であるというような認識を示してもありません。

そのような我が国であって、やはりこういう問題について、国民の一人として改めてこの問題に対してどのように向かい合っていくらいいのかということを考える場としてこのシンポジウムを使っただけだと思います。

今回のシンポジウムに当たりましては、研究所の所員であります国際教養学部の金さんに司会をお願いして、カペタノビッチさんと中央大学の目加田説子さん、それから、JVC（日本国際ボランティアセンター）事務局長でJCBLの運営委員をされている清水俊弘さんにパネラーをお願いしてシンポジウムを進めていきたいと思っています。これを機会としてクラスタ爆弾の全面的な廃絶・禁止というものが実現できるように、その一歩になればと思っています。私のおいさつに代えさせていただきたいと思えます。

司会：

ありがとうございます。

それでは、さっそくゲストをお迎えして本題に入っていきたいと思えます。

清水さん、手を挙げていただけますか。日本国際ボランティアセンターの事務局長、そしてJCBLの運営委員をされている清水さんです。

清水：

よろしくお願います。

司会：

そして、簡単に紹介からいたしますが、ブラニスラフ・カペタノビッチ (Branislav Kapetanovic) さんはセルビア出身の方で、CMCのスポークスパーソンを務めていらっしやいます。拍手でお迎えください。

それから、お隣が通訳（JCBL運営委員）の長島大輔さんです。よろしくお願います。

では、さっそくですけれども、清水さんにマイクをお渡しして、本題に入っていただきたいと思いますので、よろしくお願います。

清水・

皆さん、こんにちは。ただいまご紹介いただきました清水と申します。

今日のメインはもちろんカパタノビッチさんのお話を聞くことではありますが、おそらく、クラスター爆弾のことを初めて聞く方が多いかと思しますので、まず私から一五分ほどお時間をいただきまして、どんな問題になっているのかということをお話ししたうえで、彼のお話を聞きたいと思っております。

ちょっと最初に二、三皆さんにうかがいたいと思うのですが、「オタワ条約」という言葉を聞いたことのある方がいらっしやいましたら手を挙げていただけますでしょうか。

はい、ありがとうございます。三分の一ぐらいでしょうか。

「オタワ条約」といいますのは、対人地雷全面禁止条約といまして、対人地雷を全面的に禁止することを定めた条約です。今から約一〇年前の一九九七年に成立した条約があるのですけれども、こついつた戦争の後も市民の脅威になり続けるような無差別兵器をなくそうというのが犠牲者、そして、その人たちに寄り添うNGO、人道支援関係者が呼びかけることがきっかけとなって成立した国際条約です。それから一〇年たった今、このクラスター爆弾の問題がそのときと同様の問題意識の中から新たな禁止条約ができるという流れに乗って、ここに至ることなのですが、さて、これまでに「クラスター爆弾」というものについて何か聞いたことがある方はどのぐらいいらっしやいますでしょうか。

はい、ありがとうございます。おそらく三分の一程度ということで、やはり多くの方に関しては、このことについてご存じないかと思えます。

では、もう一つ最後に質問をさせていただきますが、私たちの国、日本にこのクラスター爆弾というものがある

と思う方は手を挙げていただけますか。

はい、ありがとうございます。日本という国にも、なぜかこのクラスター爆弾が大量に保有されているというのが現実です。

ですから、今日お話しするのは全く日本とは関係のない話をするのではなくて、同じ兵器を持っている私たちとしてもこれを持ち続けるべきなのか、否、いやなのかということもいろいろな角度から真剣に考えなければいけない問題だというようにとらえていただければと思います。

では、簡単にまずこの問題について説明したいと思います。

#### 【スライド上映】

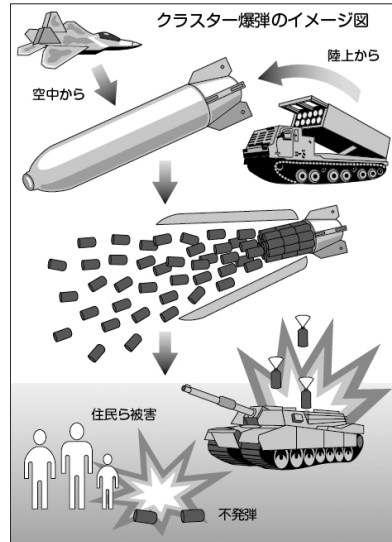
クラスター爆弾というのはそもそも、日本語では「集束爆弾」といって、読んで字のごとしで、これは本物ですけれども、こつこつした子爆弾が数個から数百個一つの親爆弾の中にまとめて、束ねられて入っているものです。さらにこの子爆弾の中に数百の鉄片であったり鉄柱であったりというものが再度爆発するという二重構造になっております。イラクやアフガニスタンの攻撃、あるいは湾岸戦争のときに、「ピンポイント攻撃」という言葉を聞いたことがあるかと思えます。ピンポイントというのは、まさにピンでつづいたように正確な攻撃と思われませんが、こつこつした兵器を使うということは当然ピンなんかで済むわけではなくて、一つの親爆弾を使えば一回でサッカー場二面分、あるいは三面分の面積が面として被弾するという非常に恐ろしい兵器であると言われております。そのタイプとしては空中から投下する爆弾と地上からロケット弾として発射するタイプのものがあります。イメージとしてはサヤエンドウの中に入っているみたいなものもあるということで、親爆弾の中に、タイプによっては一つの親爆弾の中に二〇〇個ぐらい、あるいは、中には六〇〇個の子爆弾が入っているものなど、いろいろなものが

あるというように思ってください。

これは、アメリカ製のBLU九七型の子弾です。これは実は日本にあるものと同じものでありますけれども、一九九一年の湾岸戦争のときには子爆弾の換算で、一三〇〇万個も拡散したと、使用されたという数字になります。



BLU 97



クラスター爆弾の概念図

ります。非常におびただしい数の爆弾が短時間に投下されたということになります。

これは、私自身がアフガニスタンで撮ってきた写真です。このように爆発しないで地上に残っているものを「不発弾」と言いますが、不発でこのように地面に残るものも数パーセントから、落ちる場所の条件によっては数十パーセントという高い確率で爆発しないで残ってしまいます。不発率が非常に問題になっております。

ちょっと見づらいかもしれませんが、黄色いものがポツポツと見えるでしょうか。こんな感じで、これが使われた場所にはこういうものが残ると。

また、別のタイプのもですが、モスクワやレバノンで使われたアメリカ製のクラスター爆弾です。これは二〇〇個どころではない、非常に多くの子爆弾、子弾が入っておりまして、それぞれの中からまた数百個の鉄器が飛び出してくる。いわゆる散弾銃のお化けみたいなものだと思っていただければいいと思います。これがエリトリアで

使われたものです。

また、これは地上から発射するロケット弾、ロケット発射システムとしていつぱんにばらまくものです。ものすごい数の子弾が短期間にばらまかれます。

先ほど言いましたように点ではなく、面としての攻撃手段、この恐ろしさに関しては後ほどカベタノビッチさんからさらに詳しくお話しいただければと思います。

こういった面として使われ、大量に残った不発弾がいつたいていどういう影響を及ぼすかといいますと、もうとうに終わったはずのベトナム戦争であったり湾岸戦争であったりときの残骸がいまだに人々の生活に影響し続けているという事です。例えばカンボジアやラオスやベトナムというのは当時、ベトナム戦争時代にアメリカが投下した爆弾が多いわけですが、こういったものを農村の人たちが鉄くずとして売るために分解したりするという危険な作業をすることがあります。例えば、日照り続きでお米が不作のとき、現金収入の必要になった農村の人たちが拾ってきた子爆弾を分解して事故に遭うとか、こういった単に戦争中の問題という話よりも、今もはや一般の市民生活の中での経済的な問題、あるいは貧困問題との効果ねらいとというのもあるというようにご理解いただければいいかなと思います。

これは旧ソビエト製のクラスタ爆弾の子弾で、アフガニスタンで撮影されたものです。

エリトリアの場合ですが、これは親爆弾というが、ケースのほつです。

これは、犠牲になったイラクの子どもの写真です。

これは先ほど言いましたように、金属片の鉄くずとしての価値が上



イラクの子ども

がるということもありまして、そういうことからみんな落ちている子爆弾、不発弾を金属探知機を使ってでも探して、お金に換えようということをやってしまう、やらざるを得ないような経済状況にあったりということも関係しているという話です。

これは一昨年になりますか、イスラエル軍がレパノンで大量に投下したクラスター爆弾の一つですが、見てみると、一九七四年、もう三〇年前に使用期限が切れているもの、こういった在庫を一掃整理するかのように何かの機会に大量に使ってしまうと。そして、使用期限が切れたものというのは、やはり設計したとおりには機能しない確率が高くなります。つまり、本来、不発率がもつと低いはずなのに不発率が非常に高くなったりして、そうするとその分、地雷化した不発弾が大量に残り続けるというような結果をもたらしたりもします。イスラエルは南レパノンで、少なくとも百万個に及ぶM七七型クラスター爆弾を使用したと言われております。

これはレパノンの地図です。この赤いところがそういったもので汚染されてしまっている地域だというイメージを持っていただければと思います。

これもレパノンで、M七七型クラスター爆弾の被害にあった人の写真です。

一つのピストルなどで撃つ弾丸と違って、こういったクラスター爆弾による大量・多量の金属片が飛んできてくることによって、とても複雑な傷を負い、手術がしがたい。その特定部位だけ手術をして済むというよりは、完全に切断せざるを得ないようなけがを負うというような残忍性、残虐性も高いと言われています。

あるいはこれは上から落とされるものですから、このように鉄条網に引っ掛かったり、あるいは木の枝に引っ掛かったり、場合によっては家の屋根を突き破ってベッドの上に乗っていたりとか、いろいろなケースが考えられるわけです。



まとめておきますと、広範囲にわたって影響を及ぼす、被害をもたらすということ、そして、だれそれかまわず無差別に人々を殺傷する。とりわけ、この兵器による犠牲者の中には、地雷よりも子どもが犠牲になる統計的数字が出ています。

なぜならば、地雷の場合は埋まってしまっただけで見えないうえ、もちろんそれを踏んでしまえば事故に遭うわけですが、逆にとつた空中から投下される爆弾が不発で残っている場合、その視認性が高い、目に見えるのです。目に見える状態で残っていることから、どうしても子どもはおもしろい形をしたボールみたいなものが転がっていたら、子どもでなくてもだれもが興味を持って拾い上げてしまつ可能性もあるわけです。そういったことから、この不発弾による事故は子どももとても多く含まれていると思つていただいいていいと思います。

そして、処理が極めて困難であると。これも後でカベタノビツチさんから直接お話しただきたいと思つておりますけれども、やはり普通の地雷処理とは違つ恐ろしさを持っている兵器であるといつづつにも言われております。それから、これは地雷と同じですが、紛争、戦争が終わつたといつても、この地雷が不発弾によつていつまでも復興の障害になり続けるという問題が残ることが言えようかと思つています。

今、世界で少なくとも三三カ国がこの兵器の生産にかかわつていられると言われていると。そして、実際に使つている国、これは世界で二三カ国、そして、備蓄（保有）している国が、日本も含めまして少なくとも世界で七〇カ国、あるいは七五カ国と言われております。一九九一年以降、特にイラク、アフガニスタン、コソボ、レバノンなどで大量に使用されているということから、知っている人はよく知っている、知る人ぞ知る残虐兵器として知られるようになりました。

そして、最後に日本の話をもう少し付け加えておきますと、私たちの国、日本は一九八三年から二〇〇六年まで

の二三年間にわたって、総額二七六億円という調達費用をかけて四タイプのクラスター爆弾を保有しております。驚くことに、このうちの三種類は国産品です。日本で生産されたクラスター爆弾がそれだけあるということも付け加えておきたいと思えます。

なぜ日本がこれを持つ必要があるのかということを防衛省の人に聞くと、それは海岸から上陸してきた敵部隊に対して（掃討）、それを効果的に撃退するためにそれが必要なのですということなのですけれども、日本の中でそれを使うと。日本は専守防衛ですから、防衛手段としてこれを持っているということが果たして理屈に合っているのか合っていないのかということも併せて考えていきたいと思っております。

【スライド終了】

では、まず私からの前振りはこのぐらいにしておきまして、今ちょっとざっと駆け足で説明したような、クラスター爆弾がもたらすいろいろな問題が世界にある中で、今、我々も含めて世界中の多くのNGO、そして、彼のような犠牲者自身がこのような残虐兵器の存在自体を許すわけにはいかないと、全面的に禁止するべきだという運動を盛り上げてまして、先ほど金さんから紹介がありましたクラスター兵器連合（CMC）というクラスター爆弾禁止のための国際キャンペーンがございます。今回来ていただいているカペタノビッチさんは、そのCMCの国際スポークスパーソンとして世界中の国際会議、あるいはこういった国に出向いていって、実際にこの兵器の恐ろしさを直接自身の口から語って、それぞれの国の政府が自主的にこの問題に取り組むように呼びかけているという運動の途中、プロセスにあるということです。

先週の土曜日に日本に到着しまして、さっそく月曜日から精力的に動いております。今日、来ていただいている皆さんの中でも既に新聞やテレビで彼の報道を見ている方もいらっしゃるかもしれませんが、昨日も衆議院議長

河野洋平さん、あるいは参議院議長の江田五月さん、続いて衆議院議員会館の会議室を使って国会議員を集めた議院内集会というものを開いて、いかにこれを禁止することが大事なのかということをやつと息つく暇もなく訴え続けています。

そして、今日は皆さんとこの問題について話す機会を得たということは私たちとしてもとてもうれしいと思っていますし、彼には今からお話しいたしますが、皆さんからもいろいろ後で質問していただければと思います。

では、この後、私と彼とのやり取りで話を進めていきたいと思えます。

【スライド上映】

カペタノビッチさんは今から八年前の二〇〇〇年一月に不発弾の処理をしている最中、事故に遭われました。今、ご覧いただいているのは、彼がその作業に携わっていた当時、事故の前の様子であり、事故に遭って入院している状況です。

非常に大きな事故なので、瀕死の状態から四年間に約二〇回の手術を受けて全快したという中で、現在は先ほど言いましたようにCMCのスポークスパーソンとして、今ご覧いただいているように国際会議の場、あるいは、いろいろなキャンペーンの中で精力的な発言を続けていただいております。

【スライド終了】

では、まず私からいくつか質問をしたいと思います。

実際、あなたはこの兵器が使われたセルビアという国の中で暮らすセルビア市民であり、同時に不発弾の処理にかかわってきた専門家でもあります。市民に対する犠牲というのはどのような形で見えてくるのでしょうか。ブラニスラプ・カペタノビッチ氏：

もちろんクラスター爆弾の被害者はセルビアだけでなく、全世界にいるわけですが、セルビアにおいては私のような軍の爆発物処理班がクラスター爆弾の処理に奔走していました。

犠牲者が特に多かったのは、私たち、爆発物処理班がNATOの空爆直後に処理をしそこねた時期・地域です。例えば、一九九九年五月七日にセルビア南部のNiš（ニッシュ）という町で、非公式の発表で一人の死者と数十人の負傷者が出た事件がありました。そのときは多くの犠牲者が出たと言えます。

あるいは、犠牲者が特に多かった地域といえますと、先ほど申し上げた処理が追いつかなかった地域もありますし、あるいは、クラスター爆弾が危険だということはある程度みんな知っているのですが、教育が不足しているためにクラスター爆弾の本当の恐ろしさを十分に知らないような人たちが触って犠牲者になったというケースが数多くあります。

そしてセルビアには、相当な数のクラスター爆弾が投下されましたが、その多さに比べて犠牲者は少なくて済んだといえると思います。それは、我々爆発物処理班が三〇人ほど死傷しましたが、そういう犠牲があつて、民間の犠牲者がそれほど少なく済んでいると言えるでしょう。しかし、世界にはもっともつとセルビアよりもひどい状況の国がたくさんあります。それはイラクやアフガニスタンやタジキスタンです。

本日、私が最も強調したいことはクラスター爆弾の犠牲者のうち、九五パーセント以上が市民であるということ、つまり、無関係な市民であり、本来空爆の目的であつた、敵対する国の軍の関連施設が最も少なく被害を受けているという事実です。



除去作業員

清水・

本来はその軍事的な目的、軍事対象物に対して使っているはずの兵器なのに、どうしてそんなに市民に多くの犠牲者が出てしまうのでしょうか。

ブラニスラブ・カベタノビッチ氏・

クラスター爆弾にはいろいろなタイプがもちろんです。一つの親爆弾の中に二〇二個もの子爆弾を搭載したものがありまして、セルビアに落とされたクラスター爆弾はこのようなタイプでした。先ほど一つのクラスター爆弾でサッカー場二―三面分の範囲に子爆弾がばらまかれるという話がありましたけれども、一つでそれだけなのに、いくつかのクラスター爆弾が投下されれば、かなり広い範囲がクラスター爆弾によって汚染されることになります。そして仮に軍の施設が標的に狙われたとしても、今申し上げましたように広範囲に子爆弾が散らばりますのでその周辺にある市街地、一般の人々の住んでいる住宅地に子爆弾が散らばることになります。

そしてもう一つ重要な点、市民に犠牲者があるということに加えて、二つ目に重要なのはクラスター爆弾がとても不正確な爆弾であるという事実です。つまり、クラスター爆弾は今申し上げましたように広い範囲に広がってしまい、本来の標的以外を爆破してしまうことが多いのですが、ほかにより正確な兵器というのは世の中にたくさんあります。そのような正確な兵器で本来の軍事的目的を果たせるのならばクラスター爆弾を使う意味は全くないと私は考えます。

皆さんは日本という国で原爆の恐ろしさ、原爆がいかに市民に被害を与えるかということをよくご存じだと思います。セルビアでも、世界中でも、クラスター爆弾が市民にとって危険であるということはよく知られています。

例えばレバノンでは二〇〇六年、一年間だけでもクラスター爆弾の処理のために専門の教育を受けた専門技術者

でさえ四四人も亡くなっています。二〇〇六年の一年間だけです。そのような専門の知識を持った専門家です。それだけ多くの犠牲者が出ていたということは、市民にどれだけ大きな犠牲が出ているかということをご想像いただけると思います。

清水…

そうしますと、専門家の方ですら本当にそんな危険だということですから、実際にカベタノビッチさん自身も事故に遭われたときに、その自分が処理しようとしていた不発弾に、もうほとんど触れるか触れないかのところで大きな事故になってしまったというふうにお話を聞いています。それほどちょっとした動作で、あるいは振動などで爆発してしまうような不安定なものなのでしょうか。

ブラニスラブ・カベタノビッチ氏…

クラスター爆弾というのは、私は常々申し上げていますが、こんにち存在する兵器の中で最も恐ろしい兵器であるといえます。というのは、様々な意味でそういうふうに見えるのですが、クラスター爆弾というのはとても不安定な兵器なのです。クラスター爆弾は種類によって様々な発火装置を付けています。地上に落ちて爆発しなかったクラスター爆弾の不発弾は、あるときには手で触れるだけで、あるいは熱さによって、あるいは人間の持っている微量の静電気によって、あるいはクラスター爆弾の子爆弾がセンサーを持っていたりして、様々な状況で爆発する可能性があります。そして、それらの発火装置の種類を見分けることはとても難しいことです。どうやって処理したらいいかということとはとても難しい問題です。

清水…

この禁止条約に積極的に参加しようとしていない、例えば日本もそうですが、国の中にはそのような不発で残ら

ないように不発率をもう少し改善すればいいのではないか、あるいは自滅装置を付けて、もう残らないように落ちて、残ったものは一定時間が経てば使えなくなってしまうとか、そういう技術的な改善をすれば使ってもいいのではないかという主張をしている国々がありますけれども、これに対してはどのように反応をしますか。  
ブラニスラブ・カベタノビツチ氏…

不発率を下げるためにいくつかの国々は実験を行っていますが、これらの実験は戦場においては全く非現実的な条件で行われています。例えばコンクリートで固めた滑走路にクラスター爆弾を投下する実験です。これらの国々はクラスター爆弾が爆発しないで残れば市民に危険があるということとは認めています。しかし、そのような非現実的な状況で実験をすることによって不発率が下がったというふうに主張してクラスター爆弾の正確性・安定性を主張しています。しかし、このような実験で設定される条件は、実際の戦場においては非現実的です。というのは、戦場では空港が空爆されたときにも、そのまわりには軟らかい地面の土地があります、あるいは湿地であるとか森があります。そのようなところにクラスター爆弾が落ちれば不発率ももっと上がります。

また、最新の発火装置を搭載したクラスター爆弾でさえ、これらが投下されたときに、その発火装置が壊れてしまつて想定どおりに爆発しないで残ってしまうことがあります。というわけでクラスター爆弾には、良いクラスター爆弾も悪いクラスター爆弾もありません。すべてのクラスター爆弾が悪いと私は強調したいと思います。

これらの国々は今申し上げたような実験をしつつ、クラスター爆弾の例外なき全面禁止に反対するわけですが、これらの国々の大半は自分の国の中に多くのクラスター爆弾の在庫を抱えています。これらの国々は、自国の倉庫に眠っているクラスター爆弾を何らかの方法、つまり戦争や他国におけるいろいろな戦闘で使い果たそうとしています。私は、このような状況に言葉を失いますが、クラスター爆弾の例外なき全面禁止を実現しなければな

らないと思っています。

清水…

私たちの国・日本には、先ほど言いましたようにクラスタ爆弾があるわけですが、政府は自衛のためにこの兵器が必要だと、説明しますが、そんなことは本当に考えられるのでしょうか。

ブラニスラブ・カペタノビッチ氏…

私がいまず強調したいのは、クラスタ爆弾というのは極めて攻撃的な兵器であるということです。例えばいくつかの国々は外国から攻めてきた軍に対して、日本は島国ですけれども、上陸してきた軍に対する空からの攻撃にクラスタ爆弾を使用すると主張しています。しかし、クラスタ爆弾は海に落ちたら全く機能を果たしません。海の中に落ちたクラスタ爆弾はほとんどの確率で不発のまま残ってしまうからです。

もう一つは、いままで世界で一つの国も自衛のために自分の国の領域にクラスタ爆弾を投下した国はないという事実です。自国の領内でクラスタ爆弾を使うような場合、その戦場、例えば仮にその戦場に住んでいる市民がいったん避難したとしましょう。その市民は戦争が終わった後に住んでいたところに帰らなければいけません。しかし、クラスタ爆弾が不発のままそこに残っていたら、そこでまた多くの市民が傷つくことになります。というわけで、このような攻撃的な兵器を自衛のために使うことは全く意味のない議論になります。

清水…

ありがとうございます。

カペタノビッチさんは、日本に来てからいろいろな方に会っています。特に一昨日は外務副大臣、そして、昨日には衆議院議長、参議院議長並びに多くの日本の政治家、国会議員の人たちに出会っているわけですが、カペ



タノビッチさんの印象として、これらの政治家の人たちが、日本政府がこの禁止条約に前向きに参加しそうな感触は今のところ得られませんでしたでしょうか。

ブラニスラブ・カペタノビッチ氏…

率直に申し上げますと、外務省で副外務大臣にお会いしたときには、かなり遠回しな表現でいろいろ発言をいただいたのですが、私にはどうも、私の意見に賛成してもらったとは思えませんでした。

しかし、昨日衆議院議長と参議院議長にお会いしたときには、彼らの個人的意見としてでしたが、クラスター爆弾の全面禁止、例外なき全面禁止に前向き、とてもよい感触を得ることができました。ですので、衆・参両議院の議長の強い影響力をもって国会にそのような意見が広まって、クラスター爆弾の例外なき全面禁止という意見が広まっていくことを私は希望しています。

清水…

私たちのねらいとしても、今回、彼が来て、直接、日本の政治家の皆さんに呼びかけてもらうということで、まず国会議員の人たちがしっかりとこういったものの禁止のための政治的な意思を持つこと、こういうところに働きかけることができればということで、この日本の政治家たちがどう動くかということに関して皆さんも今週、来週あたりの動きに注目していただければと思います。

先程来、私はちょっと気軽に「禁止条約」ができそうな話をしていますけれども、もちろんそれも大変な道のあるわけですが、今この条約というものが実際に形になるうとしていて、どんな位置にいるのかということに関して、これまでこの禁止条約を作るすべてのプロセスの国際会議に参加してきた同じくJCBLの運営委員の目加田さんにこの後パトンを渡しまして、今、私たちは条約ができるどの辺にいるのかということを中心に補足

していただきたいと思います。

目加田・・

今、ご紹介いただきましたとおり、私もJCBLで清水さんたちと九七年にJCBLの立ち上げにかかわり、それ以来、不発弾の問題やクラスター爆弾廃絶の問題にずっとかかわってきました。これからちよつとだけ、今ご案内いただいた「条約を作る」ということで、どの段階にいるのかということお話をさせていただきたいと思います。

今日お出での皆さんは、たぶん多くの方は学生だったり、一般市民の方々だと思えますが、「国際条約を我々がどうやって作るの」と思われるでしょう。私たちは、何かとても遠い国の話、もしくは遠い世界の話というふうに思いがちです。ちょうど一〇年前に対人地雷を禁止する条約が九七年にできて九九年の三月に発効した訳ですが、でも、その条約を作ったのもやはり市民、そして政府、国際機関が、一緒に協力をしながら条約を作ったんですね。これが新しい軍縮の形になりうるのではないかといい期待が一〇年前にあったわけですが、なかなかそうスムーズに物事はすまないわけです。ただ、クラスター爆弾でも、今まさしく同じように、我々のようなNGO、そしてもちろんカペタノビッチさんのように当事者、クラスター爆弾の被害に遭っている国の人たちであったり、その方たちを支援するような活動をしているNGOとか、あと国際機関などが一緒になって一部の政府と協力している。政府といっても、すべてではないですね。対人地雷のときにはカナダが中心にがんばったのですけれども、今クラスター爆弾の問題ではノルウェーが積極的に何とか条約を作ろうと動いています。ですので、このノルウェーの首都オスロで始まった条約作りの過程を「オスロ・プロセス」というふうに私たちは呼んでいます。それから、アイerland、オーストリア、ニュージーランドといった国が何とかクラスター爆弾を禁止する条約を作ろうというこ

とで積極的に一昨年から動き出して、具体的には、昨年二月、ちょうど一年ちよつと前にノルウェー・オスロで会

議を開いたのですね。もちろんカペタノビッチさんもいらしたわけですね。

そのとき以降、去年五月に南米のペルーの首都リマで会議を開いて、その後は昨年一二月にオーストリアのウィーンで会議を開き、そして今年二月にニュージーランドの首都ウェリントンで会議を開きました。計四回です。

これが「オスロ・プロセス」の一連の会議です。

この会議の中で具体的にどういふ条約を作ったらいのかということ、みんなで議論を進めていました。そして最終的には来月、五月一九日からアイルランドの首都ダブリンで条約交渉が二週間にわたって開かれます。

私たちは、四月一九日がちょうどダブリン会議の一カ月前という日で、「Global Day of Action」というふうに英語では言われていますけれども、要するに、世界中で同じ日に、世界各地で活動しよう、ダブリン会議を盛り上げるためにイベントをしよう、カペタノビッチさんに来ていただきました。その四月一九日がちょうど今度の土曜日になるわけですけれども、このようなシンポジウムを東京で開くことにしています。

ちょうどダブリン会議の一カ月前というタイミングですけれども、そのダブリンで何が行われるかということ、二週間の期間中、前文から、一条、二条、三条というふうに具体的に条文について詰めていきます。

例えば、私たちは簡単に今日、クラスタ爆弾を禁止するということを行っていますけれども、そもそも「クラスタ爆弾とは何か」という定義の問題があります。これは非常に微妙ですね。ものすごく厳密に研究しないと、ありとあらゆるものが対象になってしまったり、もしくは抜け道を作ってしまったりする可能性もあります。ですので、定義の問題であったりとか、それからどこまでの範囲で条約を適用するのかと、いろいろな問題がありますが、そういうことを二週間にわたって詰めてゆきます。願わくばですけれども、うまくいけば今年五月三〇日にはクラスタ爆弾を禁止する条約ができる運びになっています。

そして、今年の一二月の初旬、まだ日にちははっきりしていませんが、ノルウエーの首都オスロでこの条約の調印式が開かれることになっていきます。

非常に雑ばくですけども、全体の流れでいうと、ちょうどここ一年数カ月掛けて「オスロ・プロセス」を進めてきたというところになって、私たちとしてはあと一カ月で条約ができますので、内容の濃い、良い条約を作ってほしいというふうに考えていますし、もちろん日本政府にも、ぜひこの条約に入ってほしいということで、一生懸命、働き掛けをカベタノビツさんの力を借りながら行っているところです。

清水：

ありがとうございます。

では、まずいったんここで私たちからの報告・説明を切りまして、ぜひ皆さんからご質問、あるいはご意見などをうかがいながら、残りの時間を有効に過ごせればいいかなと思います。せつかくの機会でもありますので、特にカベタノビツチさんに対して、ご質問のある方は遠慮なく手を挙げていただければと思います。

司会：

では、残り時間まで二分ぐらいになりますので、質疑応答の時間に入ります。

最終的には、私たち一人一人はそれほど力のない学生や市民だと思えますが、私たちが何をすべきなのか、あるいは私たちにできることを教えていただくこととか、一人一人の力が結集することによってより大きな力、そして、何よりも日本に暮らす生活者として、日本政府がこの条約に加入できるように、場合によっては提言をしたり、あるいはプレッシャーをかけたなりということも必要になると思いますので、そういう点から進めて行きたいと思えます。

一つお願いがあります。ご自由に発言をさせていただくことは大いにありがたいのですが、マイクを使って所属や質問をしていただくということをお願いします。なるべく簡潔に所属や何かコメント・質問などを言ってくださいと思います。

まず、二、三人の方をまとめて質問を受けたうえで、お答えを作ってうかがうチャンスを設けたいと思いますが、今の段階で質問をせひしてみたいという方は手を挙げてくださいますか、一人、二人、三人。

では、一応お三方、その後学生に戻りますので、よろしくお願いいたします。

フロア（鈴木）：

鈴木と申します。

個人的に講演会を開いたり、暮らしの関係情報室というものなどで講演会を開いたりしていた者です。主に被爆問題を中心にやっていたのです。

質問ですが、カペタノビッチさんよりも目加田さんにおうかがいしたほうがいいのかもしれませんが、日本がそのクラスター爆弾をもう既に保有していて、今後も保有しようという意思を持っているというその理由ですが、表向きは「自衛」というふうに言っているようなんですけど、まずそれは全然おかしいというのはだれが見ても分かると思いますね。それはアメリカからの要請というか、購入して欲しいという要請なのか、それとも、日本の兵器産業とか、それから利権がらみの政治家の方がそういう動機があるのか、その辺をもしご存じだったら教えてくださいたいと思います。

あと、それからもう一点は、その地雷廃絶の条約が既にあると思いますけれども、それはそのままでは全然これには適応できないのかという、このことも時間があつたら教えてください。

以上です。

司会…

ありがとうございました。

では、目加田さん、お答えをちょっと準備してみてください。

フロア（西）…

西と申します。

現在、定年退職後、いろいろ平和問題、そういうことで市民運動を若干やっているのですが、今日の問題にも非常に関心を持ちましたので、少々質問させていただきます。

先ほどからもちよつと言われたことですので、昨日の中日新聞にも、日本政府が非常にアメリカに配慮をして腰砕けみたいだと書いてあります。そのアメリカに対する配慮というのはどついつつことなのか。それに併せて中国、ロシアも、これにはこついつつ条約を作ることには反対していますね。その辺の理由をどついつつに取るのか。それを知りたいですが。

それとも一つ、日本でクラスター爆弾を製造しているメーカーがあると思いますけれども、ぜひその会社の名前を公表していただきたいと思えます。

以上です。

司会…

それは目加田さんあるいは清水さんがお答えしてくださいませんかと思えますので、よろしく願いたします。

それでは、簡潔に願いたします。

フロア（ヒロナガ）：

南山大学四年生のヒロナガと申します。よろしく願いました。

簡単に二点お聞きしたいですけれども、私は個人的に「オタワ・プロセス」を勉強しておりまして、本来の「オタワ・プロセス」と「オスロ・プロセス」の類似点、相違点、またその相違点があるからこそ、何か難しさみたいなものがあればお教えいただきたいというのがまず一点です。

もう一点が、今、一昔前と違っていて、軍縮分野における市民の役割というのがだいぶ大きくなってきているのかなあというのが多くて、市民が訴えていくという流れができてきていると思うのですが、そういう流れの中で、軍縮分野における一般市民の役割をどのようにお考えかということと、カペタノビッチさんは実際に被害に遭われた方の観点から具体的な行動として、日本の市民に何を期待しているかということをお聞きしたいです。お願いいたします。

司会：

ありがとうございます。

そうしますと、最後の質問はカペタノビッチさんに後半の部分で質問のお答えをうかがうことにして、最初の質問の部分まで目加田さんあるいは清水さんが簡潔にまとめてお答えいただいてもいいと思いますし、個別に対応してください結構です。お願いします。

目加田：

ありがとうございます。

まずアメリカの要請で保有し続けるのかということですが、これは正直言って知る手立てはないですね。政府は

そういうふうには正式に言うことはあり得ないですし、正式には、日本は島国で、海岸線が長いので、着上陸侵攻があった際にはクラスター爆弾をもって国を守るとというのが政府の正式な見解です。したがって、アメリカから要請があるかどうかということは明確にはお答えできません。

ただ、いろいろな新聞報道、日本だけでなく欧米の報道なども見てみますと、やはりNATO諸国であったり、アメリカと軍事同盟関係にある国々に対して、日本特定もしくは日本だけということではなくて、そういった国々に対してアメリカとの共同作戦を行う際に、例えばこの条約ができて、日本やイギリス、ベルギー、ドイツ等の国々がこの条約に入ってからクラスター爆弾が使用できないようになると、共同作戦の時に問題が起きますので、その点はアメリカがこれらの国々に対して圧力を掛けているというような報道はあります。ただ、私自身が確認したわけではないので、はっきりしたことはちょっと申し上げられません。

その製造している産業というのは、メーカーを明らかにして欲しいというご質問もありましたので、我々（JCB）のニュースレターでその点も報告していますけれども、石川製作所というところが、航空機から投下型の爆弾を生産していますし、ロッキード・マーチンから輸入をしていたりとか、あとは、石川島播磨の子会社（IHIエアロスペース社）、それから小松製作所などが生産をしています。

ただ金額的にも、そのクラスター爆弾に限定していえば、分量的にもそれほど多いものではないので、これはその製造メーカー、いわゆる軍事産業からの圧力によって日本政府が政策を変更できないとか、そういうことでは全くないと我々は考えております。

それから、日本政府のアメリカに対する配慮があるかというのは、それはもちろん、先ほど申し上げたとおりで、日本としてあるというふうに思います。



それから中国、ロシアが入っていないということで反対しているというので、それもそのとおりです。ただ、これは皆さん、ちょっと注意していただきたいのですけれども、こういった国々が入らないから条約に意味がないということではありませんね。

国際条約というのは、入る人らなにかかわらず、条約ができてそれが一つの価値として社会の中に定着していくことを、規範化と言ってもいいと思いますが、それが大事です。もう少し分かりやすく言つと、例えばドメスティック・バイオレンス。昔は、男が女に対して手をあげるといのは、男の甲斐性くらいにとられて、暴力が悪いことというふうには思われていなかった。しかし、今では「ドメスティック・バイオレンス禁止法」という法律がきちんとできて、してはいけないことという価値が広まっていますね。

同じように対人地雷であれば、これは使つてはいけない兵器、もちろん生産もしてはいけないし移譲してはいけない。こうした条約の価値が社会の中で定着していくこと、持っている人であっても使えなくなっていくます。ですから実際、今日、対人地雷の禁止条約ができてもう一〇年以上経ちますので、おおっぴらに国際社会の中で使つていると言われているのは、ミャンマーとロシアくらいです。それ以外の国は持つていても実質使えない兵器になるのです。よってクラスター爆弾についても、実際にこういつた国々が入らなかつたとしても、これらの国々が使用すること、もしくは新たに生産・開発するようなことができにくい、そういう価値を社会の中で定着させていくことが第一であると我々は考えております。

それから、「オタワ・プロセス」を勉強しておられるという大学生の方がおられました。類似点と相違点というところで、これはたぶん一時間半ぐらいかけてじっくりお話をしないと、本当に色々な側面があると思うので、研究テーマとしては非常に面白いと思いますし、ぜひがんばって下さい。卒論はこのテーマですか。

フロア（ヒロナガ）：

すごく簡単なものですけれど。

目加田：

そうですか、はい。ぜひJCBLにも遊びにいらして、資料とかたくさんありますので使って書いていただければと思います。

二番目のご質問で、これは軍縮分野で市民の役割が大きくなっているということをご指摘されましたけれども、本当にそのとおりで非常に重要なことを言っていただと思います。

これはなぜかということですが、このクラスター爆弾の問題を理解するうえで非常に大事な点は、軍縮条約というと端的に言えば兵器を取り締まるわけですね。クラスター爆弾を作ってはいけない、クラスター爆弾を使用してはいけない、保有してはいけない。つまりこの兵器そのものの管理、だから軍備管理、軍縮というふうに、兵器そのものを取り扱うのが軍縮条約です。

ところが、対人地雷のオタワ条約も、それから今、我々が目指しているクラスター爆弾のオスロ条約も人道的な配慮がされている条約です。どうということかというところ、カペタノビッチさんのように被害に遭われた方をきちんと支援しましょう。そのために国際協力をしていこうと。つまり、兵器を禁止するだけではなくて、その兵器がもたらす様々な問題にも対処します。例えば兵器で汚染されて使えなくなった土地は除去をすることによって、もう一度その土地を有効に活用できるようにしよう。

それから、被害に遭われた方、それも被害に遭われたカペタノビッチさん本人のみではなくて、クラスター爆弾の条約で目指そうとしているのは、カペタノビッチさんのご家族、それからコミュニティー、それらの方々もみん

な被害者の定義に含めようとしています。同じように被害者として扱っていかねばならないというのが、条約にきちんと書かれているのです。

日本政府は、今日の話に出たかどうか分かりませんが、クラスタ爆弾を軍縮条約として、CCWという別の条約で禁止しようと提案しています。CCWにはアメリカ・ロシア・中国が入っているので、そちらでやるべきだと言っているのですが、私たちはそれはそれでやるなどは言わないですけれども、なぜ新しいこういう条約を作る必要があるのかといったら、犠牲になった方々をきちんと支援すること、そして使えなくなってしまった土地をきちんと除去すること、それをきちんとやらなければならない、そのために国際協力をしていかなければいけない、と考えるからです。オスロ・プロセスで提案されている条約案には、こうしたこともきちんと謳われているのです。

そのことを訴えてきたのはまさしく市民なのです。これは、政府が軍縮だけをやっている限り絶対出てこない視点なのです。だからNGOや市民が声を上げて条約交渉にかかわって、市民の視点からそういう問題を提起して、条約の中に反映させていくということが大事です。こうしたことをやっているのが「オスロ条約」であるし、「オスロ・プロセス」というふうに理解されていいと思います。

したがって、単純に兵器を取り締まるだけではないということに市民の役割というものが出てくるというふうに理解していただければいいかなあと思います。

司会：

少し全部の質問にお答えができたかは分かりませんが、時間の問題もあります。何よりも日本の皆様にカベタノビッチさんを通じて何をしてほしいのか、あるいは、私たちが何をすべきなのかというポイントをうかがいたいと思います。

ブラニスラブ・カペタノビッチ氏…

私から一言だけ申し上げたいのですが、日本では一般的な方法かどうかは分かりませんが、私の国ではよく行われるような、例えば嘆願運動をするとか、国会や内閣に訴えかけていくなどという方法も一つの方法としてはあるかもしれませんが。何万、何百万という人が署名をして国や国会を動かすことは十分可能でしょう。そのように一人一人がみんな力を合わせて国や国会を動かしていくことは十分できると思います。

もう一つは、アメリカの影響がクラスター爆弾の全面禁止に与える影響が大きいのではないかという意見があったと思うのですが、それはもちろん、アメリカは最大の生産国でありますし、日本のみならず世界中にクラスター爆弾を輸出しています。その影響は、もちろんあると思います。

司会…

ありがとうございます。

あと一〇分残っております。うまくいけばお二方ぐらいの質問は受けることができるかなと思います。先ほど一人おりましたので、もう一人、ほかにこれは必ずという方、大丈夫ですか。それでは三人の方に、その代わり短く簡潔にしていただけだと思いますので、よろしくお願います。

フロア(カミノ)…

中京大学国際教養学部のカミノです。

二つ質問があるのですが、五月三〇日に条約ができるとして、どれぐらいの国が参加される見込みなのですか。もう一つは、クラスター爆弾が政府や市民に大きく影響を与える爆弾だというのに、どうしてそんなに使用され続けているのですか。それはコストが安かったり、簡単に散布されるからなのでしょうか。お願います。

司会…

ありがとうございます。

フロア（村上）…

ピースボートから来ました村上と申します。二点、質問をさせていただきます。

一点がすごく基本的なこともかもしれないのですが、せつかく来ていただいたということで、今のセルビアの状況を簡単に結構ですので、具体的なお話をいただければなあと思うのと、あと「オスロ・プロセス」で、私も勉強不足ですが、加入しながらない国の主な理由というものが分かる範囲で教えていただければなあと思います。よろしくお願いします。

司会…

では、最後に短い質問をよろしくお願いいたします。

フロア（神田）…

中京大学総合政策学部四年の神田と申します。

平和活動の最前線にいる皆さんに質問なのですが、戦争は今後なくなりませんか、なくなりませんか。理想でもいいので聞かせてください。お願いします。

司会…

最後に、二泊三日でも答えが出ないような大きなテーマが出ましたが、きっとJCBLの方々は答えてくださると思います。

清水…

最後の質問には、私がお答えしましょうか。私は、もちろんなくしたいと思えますよ。そのためには、例えば私たちとしてみれば、北朝鮮の人たちとどう付きあうのか、そういうことをタブーにしないでオープンに、どんどん話していけるといふ空気が必要だと思います。

司会：

では、目加田さんに聞きましょうか。

目加田：

「オスロ条約」ができたところでどれくらい参加するのかということですが、これは期待を込めて「百を超えます」と申し上げたいですけれども、ちょっと何とも分かりません。

ただウィーンで去年一二月に会議が開かれたと言いましたけれども、そのときに一三八カ国が集まったのです。これらの国々がみんな参加するの分かりませんが、オタワ条約のとき一三二カ国でスタートしました。ですので、それに近い数、同じくらい集まれば成功かなと思います。たとえもつと数が少なかったとしても、調印式は実際には一二月なので、それまでにやはり私たちががんばって広めていくような努力をしなければいけないだろうなというふうに思っています。

なぜ使われ続けるのか。逆に、本当にそれはアメリカ政府とか使う国の方々にぜひ聞いてみたいところでありませけれども、軍事上は有用な兵器だというふうに彼らはみんな答えますので、ほかに代替手段がないという答えが一般的だろうと思います。つまり、相手に大きなダメージを安価であたえることができるというところだろうと思います。

あと平和のご質問ですけれども、私は残念ながら戦争はなくならないと思えます。けれどもなくさなければいけ

ないと思い続けること、そのために自分ができることを、やはり声をちょっとでも上げること、上げ続けること、その勇気を持つこと、それが日々、日常の中で積み重なっていつてやれることだと思えます。無関心でいることが一番罪だと思えます。

皆さん、今日、カベタノビッチさんのお話を聞いていただいて、ちょっとでもこつという問題があるのだということを知っていたら、自分は何ができるというふうに考えてみて下さい。今日知ったことを皆さんの友達やご家族の方にお話をしていただいたり、そうやって少しずつでも問題に対する理解が広がっていくことがあると思うので、そういう気持ちを持ち続けること。小さなことでも具体的な行動につなげていくことが大事だと思います、そこを忘れないで私自身もいたいなというふうに思っています。

司会：

最後に、カベタノビッチさんの強烈な短いメッセージを私たちが聞かないわけにはいきませんので、よろしくお願いたします。

ブラニスラブ・カベタノビッチ氏：

最後に、これだけたくさんの方々が集まっていたくださりまして、心から感謝を申し上げます。そして、私やJCBLのメンバーからのお話を皆さんがお聞きになって、クラスター爆弾がいかに危険で恐ろしい兵器であるかということを理解していただければ大変嬉しく思います。

そして、皆様一人一人がご自身の声を何らかの方法で発していただいて、我々の活動をサポートしていただきましたと願っています。

どうもありがとうございました。

司会：

以上をもちまして、本日のシンポジウムを終わらせたいと思います。

超豪華メンバーを中京大学にお招きできたことを社会科学研究所の一員として本当につれしく思っております。また、ここで得た知識や情報をそのまま皆さんがもったいぶらないで、まわりの人たちに分け与える行動に移していくことが大切だと思いますので、よろしく願います。

ありがとうございました。

(反訳終了)